現地ルポルタージュ

佐渡の文化

――「佐渡能楽の里」を訪ねて

はじめに

二月二〇、二一日と、新潟県の佐渡を訪問した。周知のように佐渡は、日本海に浮かぶ日本一大きな島（東京都二三区の一・五倍、人口約七五、〇〇〇人）である。真冬の佐渡は、さぞかし寒さ厳しい所だろうと、覚悟して向かった。ところが佐渡はおだやかな気候の所だった。ＪＡ佐渡の方のお話によると、佐渡は日本海に流れる対馬暖流の影響で、新潟本土より二～三度暖かく雪も少ないとのこと。四季の変化に富み農産物も豊富で、佐渡のお米は魚沼産コシヒカリに次ぐうまい米の一つとされる。特産のおけさ柿を代表に果樹栽培も盛んで、りんごとみかんが同じ地域に実るのは佐渡だけだとか。山あり、温泉あり、もちろん海ありと、豊かな自然に恵まれた所なのだ。

今回、佐渡を訪れた目的は佐渡の文化について調べるためである。しかし、たった丸一日で、佐渡の文化を知ろうなどというのは、とても無理な話。まずは現地を訪ねて少しでも佐渡の文化を感じとれたらと訪問した。

一．佐渡の文化

佐渡は、北陸や西日本の影響を強く受けているといわれる。これは古くから流人（貴族）が京からきたことや、西回りの航路が開かれてから西日本や北陸の文化が直接佐渡に運ばれたことによるもの。そして佐渡の文化の中には、流人たちがもたらした貴族文化（国仲地方：佐渡の真ん中、田園地帯）、金山の発展で、奉行や役人たちが江戸からもちこんだ武家文化（相川地方：佐渡の西北部、山裾に細長く広がる）、商人や船乗りたちが運んだ町人文化（小木地方：佐渡の南玄関口）の三つの形があり、これらが混然一体となって、佐渡独自の文化がはぐくまれていった。

佐渡には能をはじめとして人形芝居の説教人形、文弥人形、のろま人形、民謡の佐渡おけさ、相川音頭、両津甚句、真野音頭、そして鬼太鼓、花笠踊り、春駒、つぶろさしなど多くの民族芸能が伝承されており、今なお、祭りや年中行事に欠かせないものとして島の人たちの手によって受け継がれいる。

二．「佐渡能楽の里」を訪問して

新潟港からフェリーで二時間二〇分、佐渡の玄関口両津港に到着。名物の荒海もこの日はおだやかだった。両津港では、目的地である「佐渡能楽の里」のシンボル？の大きな能面が迎えてくれた。

「佐渡能楽の里」は、ＪＡ佐渡が「能の島」としての歴史と文化を生かしたいと佐渡汽船グループとの共同出資（設立当初、佐渡汽船グループ六〇％、ＪＡ佐渡四〇％）で、㈱「佐渡能楽の里」を設立、ＪＡ佐渡の広域総合流通センター（愛称「佐渡ふれあいアッセ」）内に、平成九年四月、オープンした。ＪＡからはチーフマネージャー一人（営農部）が派遣されており、実質的な運営は佐渡汽船グループに任されている。常務取締役の加藤さんに、「佐渡と能」の関係をお聞きしながら管内を案内していただいた。

佐渡と能

佐渡は、「農家の人たちが畑仕事で謡曲を口ずさむほど能の盛んなところ」といわれている。これは能の大成者・世阿弥が佐渡に流されたことも無縁ではないが、佐渡初代奉行・大久保石見長安が能楽師出身ということもあり、佐渡が天領になってから盛んに普及したという。

現在も佐渡には三三（全国に残る能舞台の三分の一、かつては二〇〇以上あった）の能舞台が現存しており、その大部分は神社にある。佐渡の能は神に奉納する神事として始まり、庶民の手で村々の鎮守の祭りの場へと広まっていったという。六月には毎日のように各地で能が演じられている。

「佐渡能楽の里」

「佐渡能楽の里」は、建物延床面積三、六七三㎡の二階建て和風建築。一階は、「能楽館」と「佐渡物産館」。二階には「能楽資料館」と「展望大食堂」がある。

「能楽館」では、本格的な能舞台で等身大のロボットによる能（「道成寺」のダイジェスト版）が常時上演されている。そのロボットとは思えないリアルで優雅な舞いでは、パンフレット通り〝幽玄の世界〟が味わえる。「能楽館」の出口の扉を開けると、自動的にエレベーターが稼働し二階の「能楽資料館」へ。ここには、佐渡の人たちが代々守ってきた能面や能装束など、各種の能楽美術品が分かりやすくテーマ別に展示されている。資料館の隣が、大佐渡の山並みを背景に加茂湖が見渡せる「展望大食堂」だ。一階の「佐渡物産館」にはＪＡの直販コーナーがあり、佐渡の特産物が数多く揃えてある。昨年、「道の駅」にも指定され、佐渡最大の観光・物産の拠点であり、島おこしの拠点でもある。

「能楽館」ではロボットによる「道成寺」が上演されている。

三、「文弥人形」の座長さんにお会いして

今日の宿泊先は金井町にある民宿の「桃華園」。オーナーの平田さんは、十年前、「佐渡が大好きで一家で奈良から移住して来た」という方。奥様のみどりさんは昨年秋、町議選に当選、佐渡では三七年ぶりの女性町議員でもある。そのみどりさんの計らいで、翌日、「文弥人形」の座長の本間照代さん（五二歳）にお会いすることが出来た。

佐渡には、「説教人形」、「文弥人形」、「のろま人形」の三つの人形芝居がある（いずれも国の重要無形文化財）。その一つの「文弥人形」は、文弥節にあわせて遣う人形で、語りは延宝期の岡本文弥の文弥節を伝えるもの、代々盲人の間にうけつがれた座敷語りであった。これは説教人形遣いの大崎屋松之助、文弥語りの伊藤常磐一によって作りだされた人形芝居、用いられる物語は近松の作品が多い。他の人形芝居同様、村々の祭りの余興として演じられてきた。現在、島内に十の座がある。

本間さんの「常磐座」は女性（五名）だけの一座だ。文弥遣いの第一人者、浜田守太郎氏の女性門下第一号の本間さんを座長に、昭和四八年結成された。本間さんを含めた五人のうち三人が元新潟交通のガイドさん。文弥との出会いはそのころだ。夜、食事の後かたづけが終わった後が練習時間となる。祭りが始まる四月から年三〇～三五回上演するという。

現在、女子高校生にも指導している。本間さんは「（文弥人形を通して）伝えたいのは『わ』の大切さです。『わ』は平和の和であり、人の輪の輪です」と話す。張りのある良く通るきれいな声と、活き活きとした表情が魅力な方だ。

さいごに

帰路、両津港に向かう途中、真野町に残る大膳神社の能舞台を拝見した。境内に一歩足を踏み入れその能舞台を目にしたとき、その美しさに思わず感嘆の声をあげてしまった。手入れの行届いた茅葺屋根と美しい鏡板。よくこれだけのものが守られてきたと驚きを覚える。佐渡の人々の愛情とその伝承のエネルギーが感じらる舞台だった。

なぜ、佐渡にはこれだけの文化が守られ、受け継がれてきたのか。「豊かな自然、豊かな文化、他では無くなってきている貴重なものが佐渡にはたくさんある。でも佐渡の人たちには、それが特別なものではない。（自然も文化も）自分たちの（無くてはならない）日常生活の一部なのだ」という平田さんの言葉を思い出す。そこに答えの一つが隠されているように思う。（金子三枝子）